

SONRISA

# そんりさ

Vol.132



グアノを採集する作業員は、すさまじいホコリを防ぐため、砂漠の民ベドウィンのような姿で働いている（本文 13 ページ）

ボリビア・ガソリン危機

「そんりさ」はスペイン語で「微笑み」を意味します。私たちレコムは様々な活動を通じてラテンアメリカ・カリブの人々と喜びを分かち、共に生きていきたい、彼らの微笑みを私たちの微笑みにしたいと考えています。

- |    |                    |             |
|----|--------------------|-------------|
| 02 | ボリビア・ガソリン危機        | ……翻訳ワークショップ |
| 06 | ボリビアだより アルゲダス生誕百周年 | ……藤田 護      |
| 10 | ペルー 鵜とともに暮らす2      | ……古谷 桂信     |
| 14 | メキシコ「平和のための沈黙の行進」  | ……小林 致広     |
| 17 | ラ米百景               | ……伊高 浩昭     |
| 19 | 音楽三味♪ ペルーな日々       | ……水口良樹      |
| 21 | メキシコ食巡り            | ……ミゲル・アクーニャ |
| 22 | ラテンアメリカ交流事業の紹介     | ……池田 佳代     |
| 23 | ニュースクリップ           | ……サザエ       |

2011年8月6日 日本ラテンアメリカ協力ネットワーク（RECOM）発行

# ボリビア ガソリン危機の嵐のあとに

ラウル・シベチ 2011年2月3日 (CIP Americas)

昨年一二月末ボリビアでは、燃料価格がとてつもなく引き上げられた。このことで、左派政権になってから初めて、政府に対する大規模な民衆の反対運動が起こった。そこで起こったことは、それまで(の新自由主義)とは根本的に異なる新たな発展の方策に転換することの難しさを示す一方で、エボ・モラレス政権が提唱する、国家の再創造と脱植民地化を図ることの限界をも見せている。

市場調査会社 Ipsos が最近公表した世論調査によると、モラレス大統領の支持率は二〇〇七年の八四%から二〇一一年一月には三六%にまで下落し、市民の五六%はその政策を否定している。副大統領のアルバロ・ガルシア・リネラに対してはさらに悪く、二〇一〇年一月には四六%だった支持率は二九%に下がり、七一%は不支持を表明している。

炭水素省元大臣のアンドレス・ソリス・ラダは、「モラレス大統領が政権に就いてからのこの六年間で、彼が始めた政治経済的な転換は達成できたのか」と疑問を投げかける。彼はそれにはつきりした答えは述べていないが、このような問いかけがこの国でおおやけに投げかけ

られるようになったのは初めてのことである。昨年一二月末に燃料の法定価格がとんでもなく引き上げられ、社会の大混乱が起こりそうになったためにわずか五日後に撤回された一件は「ガソリナツ」と呼ばれている。これはボリビアにおいて政権を揺るがすものであり、まさに新たな政治的局面に導くものだった。

この事件に関しては多くの政治評論家が解説しているが、わずか一年前に六四%の国民の支持を得て再選された政権が、これほど深刻な社会危機に直面することになるとは、誰も予測はしていなかった。しかも、有権者の八〇%以上がモラレスに投票したもつとも強力な支持基盤の地域で、政府の決定に対して非常に激しい反対運動が展開されたのである。アイマラ民族の多いアルティプラーノ高地やチャパレ地方のコカ栽培地域では、先の選挙で自分たちが投票した政府に対して激しい抗議行動が展開され、政府機関の建物に対する襲撃や放火も起こった。

ボリビアの情勢は非常に複雑だが、支持率は高くても実際には政権が弱体化国々で起こりうることを暗示しているのかもしれない。以下にまとめた一二月末の五日間の出来事を見れば、現在何が問題になっているか、その方向性がつ

かめるだろう。

## 終わらない暴動

一二月半ば、各メディアはボリビアと周辺各国の間にガソリン価格の大幅な差があり、それが密輸と多額の外貨流出を招いているという政府広報を流し始めた。一月二十六日の日曜日、エボ・モラレス大統領がベネズエラに旅行中に、アルバロ・ガルシア・リネラ副大統領が政令748号を發布し、これによってガソリンは七二%、ディーゼルは八二%値上げされることになった。日曜の、それもクリスマス翌日に、しかも大統領の不在の間にこのようなことを実行したこと自体、政府の弱みを示すものだった。

翌二七日月曜には、運送労働者らの二四時間ストが始まり、さまざまな市民団体が値上げ反対の宣言を表明した。二八日にはウアヌ二鉱山の労働者らが二四時間ストを決行。政府官僚は、抗議活動は小規模で局地的なもののみなし、値上げの決定は「取り消し不可能」とした。モラレス大統領はベネズエラから戻ると、教育、医療、軍、警察の各分野で二〇%の賃上げを決定した。三〇日水曜にはあらゆる都市部で抗議デモが始まり、国の機能はマヒするにいたった。

さまざまな市民団体、地区委員会、組合、農民や先住民組織が政令748号を拒否した。コチャバンバでは一万四〇〇〇人がデモを行った。チャパレのコカ栽培者らは、モラレス大統領の主要な支持基盤であり出身団体であること

から、大統領の無条件の支持者と信じられていたが、その彼らも道路封鎖を行った。運送労働者らはさらに四八時間のストを行うと予告した。政府は、普段は反政府の立場にあるポリビア民間企業連盟と全国商工会議所の支持を取り付けた。

政府への支持が広範で強固な鉱山地域でも、大規模な集会が開かれた。エルアルトは選挙の際には八一%もの得票率をあげた、まさに大統領派の砦ともいべき地域だが、人々は値上げに賛成の意を表明した組織の本部を襲撃した。二〇〇三年にゴンサロ・サンチェス・デロサダ（新自由主義を推進したポリビア七四代および七七代大統領）に対する蜂起を主導した伝説的な地区委員会連盟や、地域労働者センターも襲撃を受けた。さらに市役所と与党の社会主義運動（MAS）に近いグループの本部がいくつも襲われた。

さらに、エルアルトとラパス間ハイウェイの料金所が放火され、ベネズエラ国旗とモラレス大統領の肖像画が燃やされた。ラパスでは、三万人の大規模デモが行われ、政府庁舎のあるムリージョ広場に入ろうとした人々を制止しようとした警官らが暴行を受けた。二月三二日、モラレス大統領はチャパレ地域で支持を求めてコカ栽培者の集会に出席したが、集会出席者らは大統領にガソリン値上げの撤回を求めた。

大晦日、年明けまで二時間を切った時刻になつて、大統領は会見を行い、政令748を撤回することを国民に伝えた。値上げは不可避の

ものだが、国民の反対があるので撤回するのだと述べた。年が明けて一月二日、副大統領は、「長期的にはこの状況は維持しきれない」ので燃料値上げは必要だが、各社会セクターと合議のうえで方策がとられる予定であると述べた。

## 石油企業の支配

ここに述べた出来事からわかるのは、もし政令を撤回しなかったら、この国では四度目の社会動乱が起こつていただろうということである。これは、二〇〇〇年四月、「水戦争」と呼ばれるコチャバンバでの大規模な蜂起によって、右派政権が水道水の民営化を撤回せざるを得なかったとき以来のことである。政府はガソリン値上げに対する民衆の反発を困つたことだというが、ガソリン価格を据え置いたために年間三億八〇〇〇万ドルもの補助金を費やしているのに、そのうち一億五〇〇〇万ドルは密輸で消えているという状況を改善する方策を議論しようとしたことは一度もなかった。

ソリス・ラダは、「ガソリナツソによって、石油企業が国をふたたび支配し始めていることを皆が認識するようになった」という。それは約六年前に決定された炭化水素の国営化を無意味なものにし、過去に戻るものである。ラダ元大臣は、鉱業分野での「国営化推進」については評価する。リチウム塩や銅の精製プラントの創設、ウアヌニの鉱業施設の拡大、スズの鑄造所、そして政府による金生産のコントロールを

可能にしたポリビア金公社の設立などである。しかし国民はみな、米国の大富豪ジョージ・ソロスが所有するサン・クリストバル鉱山では亜鉛、銀、鉛を採掘し、年間一〇億ドルも利益を上げているにもかかわらず、たった三五〇〇万ドルしか税金を払っていないことを知っている。ポリビアの外貨準備高は一〇〇億ドルにのぼり、これは史上初の高い額だが、これは通常支出（賃金と社会福祉）に費やされている。公約した「工業の大躍進」を実現させたいなら戦略的な投資が必要だが、そのためには使われていない、とラダ元大臣は述べる。

マクロ経済のデータはいまや専門家だけの秘密ではなく、国民の大部分はそれを知り、議論しており、そのためどの政府も勝手なことはできなくなっている。元土地省副大臣アレハンドロ・アルマラスは、ガソリンの密輸と補助金支出の問題は、国営のポリビア油田公庫（YPF）が石油企業に投資の返還のために支払うと約束した一五億ドルに比べればまったく支払うことがないという。これらの企業は依然として操業を続けながら、投資の返還を受けているのである。

さらに、国家に対する重大な犯罪が行われた証拠があるにもかかわらず、多国籍企業のトランスレデスに政府が二億五〇〇〇万ドル支払ったことも告発している。また「我々は相場よりも年間七億ドル分も安く液体ガスをブラジルに売っているが、それはこちら側に分離プラントがないがためだ。そのプラントの建設にはたつ

た一億五〇〇万ドルほどしかかからないのに、ずっと前から作るといい続けながらまだできていない」という。

アルマラス元副大臣は、「現在操業中の油田はごくわずかで、生産量は減少し、国内消費をまかなうに足る石油を生産することはもうできない」という。しかし採掘可能な油田地帯の大部分は、多国籍企業が所有している。「我が国の残りの炭化水素資源の八〇%以上は、それら多国籍企業の手のなかにある」。多国籍企業とはつまり、ペトロブラス、レプソル、トタルの三社で、これらこそが国内価格引き上げで最大の利益を得る企業であり、それによって新しい油井の開発に再投資できるようになるのだ。

政府は値上げの理由を明確に説明できなかった。モラレス大統領は、女性が哺乳瓶に入れたり、男性がベルトに隠したりしてガソリンを密輸しているなどと述べたが、民衆はそれを聞いてさらに激怒した。

### 開発主義に関する議論

多くの批評家が政府の進める開発モデルについて議論する必要があると主張している。ルモンド・ディプロマティック紙のボリビア版編集長、パプロ・ステファノニは、「環境に配慮した新しい開発主義」に賛成のようである。ボリビア労働組合主義を強固に支持する、トロツキー派の流れをくむ同氏は、お守りのような古色蒼然たる意見を述べる。「もし石油採掘企業がほし

いだけ稼げないから投資をしないとやら、国有化して労働者が自主操業するしかない」。

開発企画省元副大臣ラウル・プラダに代表される左派グループによる状況分析はもつと奥が深いようだ。反植民地主義を派手にうたつていても、政府の手法や持ちだされる議論を見ると、「新自由主義の論理」が依然として政権の中で幅を利かせていることがわかる、というのだ。さらに経済状況は、代替的な発展モデルの最初の段階に入るにもほど遠いという。このセクターは、「資本主義や近代主義、開発に対するオールタナティブな文明化モデルの視点から、脱植民地化プロセスと多民族による共同体的で自治的な国家の創設」を再活性化することを主張している。

疑いなく、言葉は上等で志も素晴らしい。しかし二〇〇九年制定の現行の憲法にすでにうたわれているその主張は、地域に依存した（ボリビアのような）小さな国の急を要する問題に対して、具体的な解決法を示すにはほど遠い。この意味では、直面している問題はボリビアだけの問題ではない。

事実、ボリビアは、経済面において国家の役割を強化し、慎重なマクロ経済政策を行い、通貨の切り上げによってインフレを抑制しようとした。だが天然資源の価格上昇によって得られた外貨準備高と産業を推進する現実的な政策をとつていても、期待されたような結果は出ていない。工業化への道は、予想よりもずっと複雑で長く、険しいことが見えてきた。

実際、今回の燃料価格の値上げは、多国籍大企業の「ノウハウ」なしには、たとえ資金があつても、一次産品に付加価値を賦与する新しい発展モデルを実現するのは、ほとんど不可能に近いと認めたことでもある。受け入れがたいかもしれないが、これは帝国主義や資本主義、多国籍企業だけの問題ではない。

これまでの例から見ても、「工業の大躍進」のためには、何十年にもわたって国家と国内資本がともに力を合わせ、国際資本と競争し続けなくてはならない。ブラジルとペトロブラスをはじめとする同国の大企業は、一九五〇年代に同様の道を歩み始め、半世紀後の最近になってようやく成果をあげ始めた。これは黄金律ではないが、目指すような大躍進は一つや二つの政権の間に実現しえないことは確かだ。ましてやボリビア憲法が目指すような野心的な転換を実現することは容易ではない。

そのうえ、今日世界的に新たなインフレの波が起こっており、それは二〇〇三〜〇八年の間のインフレ率より高くなっている。国連食糧農業機構（FAO）は最近、米、小麦、砂糖、オムギ、食肉の国際価格が二〇一一年も上昇を続け、〇七〜〇八年の水準を上回るだろうと発表した。そして価格上昇は八〇カ国以上に影響を及ぼす可能性があり、（デモや暴動から政権崩壊に至った）チュニジアや、二〇%のガス価格上げが行われた（ことで激しい反対運動が起きた）チリ南部のような状況も起こりえるとしている。

## 政治危機への対応

二〇〇〇年から、モラレス大統領が政権に就いた〇五年までの間、ボリビアは社会的に不安定な環境にあったが、貧困率を引き下げ、ため補助金や食糧切符など幅広い社会政策に国家予算をつぎ込むことで社会の安定を保ってきた。これまで物価上昇率は、国費の支出を増やしてもまだある程度余裕があった。だがいまやインフレ率はかつてなく高くなり、物価上昇のペースが加速したことで安定が崩れつつある。

それだけではない。昨年、モラレス政権はいくつかの失敗を重ね、社会主義運動(MAS)の伝統的な地盤において、地方選挙で大幅な敗北を喫した。二〇〇九年一月に二期目の大統領に六四％という高い得票率で再選されたが、二〇一〇年四月には与党は国内の主要一〇都市のうち七都市で敗北し、エルアルトでも大きく後退した。その後、ラパス県の農民と自治法を巡って多くの紛争が起こり、また生産イニシアティブを巡ってポトシ県の市民委員会とも問題が持ち上がった。

アイマラ人社会学者パブロ・ママニ・ラミレスは、新しい先住民知識人を代表するひとりだが、四つの問題を指摘している。一つ目は炭化水素国有化の失敗。これは実際には国家の立場が有利なるよう企業との契約を修正しすぎなかった。二つ目は脱植民地化と国家再建の失敗。三つ目は、現政権になってから国内の構造

的な大問題をすべて解決したかのようにごまかしていること。そして四つ目が社会的対立の再発で、これによって政府に対する市民の支持率が下がっている。

これら四つの問題はいずれも重要だが、最後の問題は国家を重大な政治危機に導く可能性がある。というのは、これまでは民衆の積極的な支持が困難な状況を克服するうえでもっとも重要なよりどころとなってきたからだ。ママニはエルアルトで起きた、国や社会運動組織の施設への襲撃や放火といった事件について分析し、政府側に立った執行部は民衆から事実上無視されたと結論づけた。人々は自分たち自身が所属する組織の方針から外れ、さらには反逆する行動に出たのだ。

748政令によつて起きた危機的状况に対応するためにNGOらによつて設立されたガソリナツソ緊急対策委員会が声明文を発表し、サンチェス・デロサダ政権を打倒した二〇〇三年一月以来の闘争を一時休止するとした。

ボリビアでは依然として激しい権力闘争が繰り広げられている。今回の出来事で特筆すべきことは、選挙では厚い支持を得ているにもかかわらず、政府の力は脆弱で、国の財政面を改善するための値上げも実行できず、引き下がらざるをえなくなり、左翼政権の矛盾をさらしたことである。すなわち、右派に対しては一致団結して協力するが、市民運動を前にしては不協和音が起こるのだ。

今日のボリビア情勢は、現政権が目指す発展

モデルの根底にある問題点と矛盾を示している。それは、民営化ではないにしても、依然として新自由主義的だということで、そのような問題は、今のところは危機的状况とは縁がないと思われる他の国々でも、すぐに表面化してくる可能性がある。(訳||山本昭代)

ラウル・セベチは週刊誌 Brecha de Montevideo の国際アナリストで、Multiversidad Franciscana de América Latina の社会運動に関する講師兼調査員。また多くの市民団体のアドバイザーも務めている。Programa de las Américas(www.cipamericas.org/es)。にも毎月記事を書いている。

# ボリビア便り (その6)

## — アルゲダス生誕百周年の国際会議 —

藤田 護 (注1)

一年間日本で仕事をしていたのですが、再び研究資金を取ることができて、ボリビアのラパスで二年間暮らすことになりました。なので、今回は隣国ペルーからの報告です。

今年二〇一一年は、ペルーの作家ホセ・マリ・アルゲダス (José María Arguedas) の生誕一〇〇周年になります (彼は一九六九年にピストル自殺をしました)。アルゲダスは白人の家庭の生まれでありながら、アンデス各地を転々とする弁護士であった父親の仕事や、再婚した継母との関係などで、幼少期をインディオと過ごした時期もあり、海岸部の首都リマに住むようになってからもアンデスに心情的に深くかかわりながらケチュア語とスペイン語の狭間で創作を続けた人で、民族学者としても有名でした。アンデス研究に携わる者にとって今でも重要な存在であり続けています。日本語では『ヤワル・フィエスタ (血の祭り)』 (Yawar festa) と『深い川 (Los ríos profundos)』 (そして短編集が二冊、杉山晃先生 (清泉女子大学) の翻訳で出版されています。杉山先生は学部時代の私のスペイン語の先生で、その穏やか

な佇まいのなかで非常に多くのことを教わりました。アルゲダスへの関心も、もとはといえば先生の授業に端を発しています。スペイン語講読の授業で「少年の恋 (Warna Khuyay)」などを讀んだことを今でも覚えています。(注2)

クスコ市では、アルゲダスに関する国際会議が六月三〇日、七月一日、二日の三日間にわたって行われました。その直前にはリマのカトリカ大学で、その直後には同じくリマのサンマルコス大学で国際会議が開催されて、まさにアルゲダスの年というのを実感させると言えるでしょう。このクスコでの国際会議の主たるコーディネーターは、クスコ大学のリカルド・バルデラマ (Ricardo Valderama) とカルメン・エスカランテ (Carmen Escalante) の二人によるものでした。この二人は、ペルーのケチュア語のオーラル・ヒストリーの分野で、人類学者であれば知らない人がいない重要な仕事をしてきたカッパルで、クスコ市内で荷負い人夫 (q'ipiq) をしていたグレゴリオ・コンドリ・マニ (Gregorio Condori Mamani) の自伝 (人物名と同名のタイトル)、家畜泥棒の村の村人たちの自伝 (Nuganchik Runakuna)、アレキ

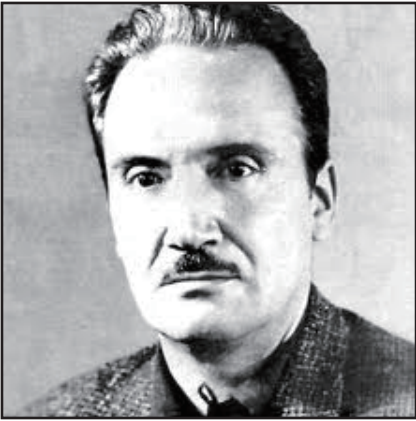
パ県のコルカ溪谷の村々の伝承 (La doncella sacrificada) など、この分野で重要な著作を発表しています (注3)。

今回は、この会議の模様を私の視点から報告してみたいと思います。多種多様な情報を圧縮して扱いますので若干読み難くなるかもしれませんが、現在の研究と会議の雰囲気がある程度伝えられればと思います。幾つかテーマを省略している部分もあり、書誌情報も最低限の記述に留めることとします。

開会のあいさつでリカルドは、アルゲダスを記憶の中にとどめるだけでなく、具体的な今のペルーの現実の中で考え、考え直さないといけないのだ、という課題を掲げました。また、(当然のことですが) 今年のノーベル文学賞受賞者のマリオ・バルガス・リョサが住んでいる (別) 世界に対する批判的な空気、特にバルガス・リョサのアルゲダス論 (La utopía arcaica) に対する批判的な空気を基調として会議の議論がなされたことも記しておかなければならないでしょう。クスコ大学のチュンビビルカスの学生楽団 (Estudiantina Chumbivilcana) による音楽の演奏から会議は始まりました。

会議冒頭の基調講演を担当したマルティン・リエンハルト (Martin Lienhard)、チューリッヒ大学) が強調したのは、アルゲダスには文学自体について考察した (≡メタ文学的な) 重要な論者が存在するという点でした。それは、フアン・ルルフオ、セサル・バイエホ、ジョアン・

ギマランエス・ローザなどの文学者に関する論者が存在しているだけでなく、主として口頭で話される言葉だけで生活が営まれている村々での(広い意味での)「文学」の役割についての考察が存在しているということなのです。そこでの「詩 (poesia)」が喜びや悲しみや切迫した感情の歌いや叫びであるとするならば、「語り (narrativa)」は宇宙論や世界観を表すものです。そこでのアルゲダスの態度は、ケチュア語へのスペイン語からの干渉 (interferencia) が存在する現状を認め、ケチュア語の純化主義的な方向に反対するものでした。また、クスコ市内で教養人層が担っていたケチュア語の詩についても、そこには植民地期以前の要素と、植民地時代のケチュア語詩のモチーフ、そして古いカトリックの非伝統的な要素が混在して成立している、という重要な文献学的考察をして



ホセ・マリア・アルゲダス

いたそうです。そして、同時代のケチュア語詩人でクスコ大学のケチュア語学者で大農園主 (アセンダード) でもあったアンドレス・アレнкаストレ (Andrés Alencastre) (詩作上のペンネームはキクル・ワラカ (Kiklu Warak'a、「カ」は破裂音) の詩から、ケチュア語の詩が(共同体ではなく)個人の創作となり、文字で書き記されるようになり、そこにはある種の人工的な言語が形成されていく様相を見て取った上で、アルゲダス自身のケチュア語による物語と詩の創作へと進んでいく過程が、説得的かつ魅力的に議論として展開されました。そこでは一つの地方の方言ではなく様々な地域のケチュア語が混用されます。この発表は、アンデス文化における間テクスト性 (intertextualidad) と「文化の境域を超えた変容 (transculturación) の過程への着目を一層迫るものでした。

(ちなみにアルゲダスの晩年の重要作『全ての血 (Todas las sangres)』には、アンデス文化を愛する暴力的な農園主ドン・ブルーノ (Don Bruno) という矛盾に満ち満ちた人物が登場しますが、上記のアレンカストレがそのモデルだと言われています。彼との出会いを通じてアルゲダスは、アンデス文化が、そしてケチュア語がインディオだけのものではない、という複雑な問題と再度対峙することになったと考えられるでしょう。小説での Don Bruno はインディオと対等の位置へ近付こうとし、それによって精

神の平安を得ていきますが、現実世界のアレンカストレは自身の農園(アシエンダ)の農民たちによって殺害されます。ちなみに彼の父親もまったく同じ運命をたどっています)

アルゲダスがクスコの南にあるシクアニ (Sicuaní) で学校の先生をしていた時代(一九三九年〜四二年)、マランガニー (Marangani) の神父で、既に民話の採集を進めていたホルヘ・リラ (Jorge A. Lira) と、その家政婦として働いていて極めて優秀な語り手であったとされるカルメン・タリパ (Carmen Taripha) との出会い、そしてそれに続くプエノスアイレスの「ラ・プレッサ (La Prensa)」紙への連載が、『深い川』の文体を作ったのだとするオディ・ゴンザレス (Odi González) 詩人、ニューヨーク大学) の発表、そして、アルゲダスはクスコを中心とするリラ神父だけでなくエフライム・モローテ・ベスト (Efraim Morote Best) などの民俗学者たち (folkloristas) の集団の一人であったと位置付けるリカルド・バルデラマとカルメン・エスカランテ (Ricardo Valderrama y Carmen Escalante) ともにクスコ大学) の発表は、その補完的な位置付けになったと言えるでしょう。

アルゲダスが用いたケチュア語の性格を再検討したブルース・マンハイム (Bruce Mannheim) (ミシガン大学) の発表も重要な指摘を行いました。代表的なケチュア語学者の一

人であるマンハイムは、アルゲダスにとつてケチュア語は母語ではなかったようだ指摘し、彼のケチュア語を都市混血層のケチュア語だと位置付けました(注4)。彼の発表は、近年のケチュア語に関する言語学・社会言語学的研究の進展を踏まえたもので、ケチュア語のパロールには社会階層などに応じて多くの声 (voices) があり、決して平板な世界を構成しているわけではないことに注意を促すものでした。私にとつても大きな気付きであったのは、(現代でも多く存在する)モノリンガルとして育つ子供たち(と大人たち)は本当に三母音のみでケチュア語を発音するのであり(注5)、スペイン語を覚える際にそれこそ一語一語確認しながら五母音の体系を苦勞して身に付けるのだそうです。また、社会的な階層の体系もインディオからチョロ、そしてメスティソへとグラデーシオンを成しているというよりは、ある人が複数の関係において異なるポジションを取っているものであり、ある時に優位な側に参加することで、別のときに差別する側となつて自分に跳ね返ってくる、そのような形で全体の体系が強化されていくのだそうです。これらの例を見ながら、ケチュア語からスペイン語への唯一の翻訳というのはいずれ、単一の「ケチュアの思考」というのもありえないのだという指摘をした上で、アルゲダスのケチュア語が一つのヴァリアントに過ぎない(≠他のヴァリアントを無視することは、それらの人々の存在を否定することにつながる)のだという指摘をするところにマ

ンハイムの発表の主眼はありました。しかし同時に、アルゲダスは、一九六〇年代のリマの人々にとつては「残余 (residuo)」に過ぎなかったこれらの人々を「人」として認めていたのであり、アルゲダス自身の矛盾に満ちたポリテクスを理解していくことが重要なのだという指摘が併せてなされました。

人類学者としてのアルゲダスの位置付けに焦点が多くあてられたのも、今回の会議の特徴でした。たとえばアルゲダスはリマのサンマルコス大学に提出した博士論文で、ペルーとスペインの共同体の比較調査を行いました。これを人類学における植民地的関係の逆転の企てであると捉える発表(ジャン・ジャック・デコステ、Jean-Jacques Decoster、ティンカー財団)、スペインにおける人類学研究における先駆的な業績でもあると指摘する発表(ネルソン・マンリケ、Nelson Manrique、サンマルコス大学)、スペイン国内でもそのフィールドでアルゲダスを記憶している人々の証言の収集が行われているという報告(パブロ・デル・バイエ、Pablo del Valle、カトリカ大学)などがありました。

セシリア・リベラ (Cecilia Rivera、カトリカ大学) は、『上の狐と下の狐 (El zorro de arriba y el zorro de abajo)』の執筆過程で、アルゲダスが社会学者アニーバル・キハノ (Anibal Quijano) に「フィールドワークが足りない」と言われたエピソードを引き合いに出し、実際にアルゲダスがどのようなフィールドワークをしていたのか、民族誌的報告書を書くための

フィールドワークと小説を書くためのフィールドワークは果たして同じなのかという問題がいまだに考察されていないと述べました。また、晩年の講演(“No soy un aculturado”)でアルゲダスが用いた「幸福な悪魔 (demonio feliz)」という表現に着目しながら(注6)、この強い矛盾が維持されることで全てのパトリア (todas las patrias、複数形なので様々な人・集団にとつての様々な形での郷土と考えるべきでしょう)とつながることができるのであり、安易な矛盾の解消を試みてしまうと、自由と反逆 (subversion) の可能性も消滅してしまうのだという指摘を行いました。また、ある地域のケチュア文化が消滅しつつあると書きながら、同時に神話的インカ王 (Inkari) が復活しつつあるとも書くという、アルゲダスにおける解消しない逆説を理解していくことの重要性をも主張しました。

ロドリゴ・モントヤ (Rodrigo Montoya、サンマルコス大学) は、ペルーの人類学はインディオへの外部からの温情主義的関与であるインディオヘニスモ (indigenismo) の子供として誕生したことを指摘しました。その系譜から脱却するには多大なる努力を要するのであり、ホセ・カルロス・マリアテギ (Jose Carlos Mariategui) が自らをインディオヘニスタとして位置づけられることを拒否し社会主義者として自己を位置付けたこと、アルゲダスもこの呼称を拒否したことを、このような文脈に位置付けて理解しなければならぬと述べまし



た。そしてアルゲダス以降の現代のペルー文学が都市のことしか扱わなくなつたことにマリオ・バルガス・リヨサは大きな責任の一翼を担っていると指摘したうえで、バルガス・リヨサのアルゲダス評価を、(1) 無条件の賞賛

(2) 前近代的小説であり『全ての血 (Todas las Sangres)』を失敗作だと評価する、(3) 『上の狐と下の狐』を作家自らの自殺を作品内に組み込むとは感情をフックとした読者への詐欺 (chantaje sentimental) だと糾弾する、という三つの段階に分けて捉える見方を提示したうえで、ノーベル賞受賞後のストックホルムの講演で「全ての血」を標語として掲げ『No soy un aculturado』の論理をそのまま用いて自らの講演に告白性と濃密さを与えようとするバルガス・リヨサの言説上の戦略に対し、裏にペルー国内でどれだけの暴力的な言論攻撃をアルゲダスに対して行ってきたのかを思い起こす必要があると主張し、会場全体からの大きな拍手を浴びました。

アルゲダスと同時代を生き、一九六〇年代のペルー・アンデスでの農民紛争の重要な指導者であったウーゴ・ブランコ (Hugo Blanco) は、アルゲダスの最晩年の時期にケチュア語で交わした書簡の思い出を述懐しながら (注7)、アルゲダスを読むことは現代の鉱業と石油・天然ガスの採掘を巡りペルーで増加しつつある先住民との紛争への政治的関心と連帯へとつながらなければならないと、現代ペルー社会における政治的無関心に強い警鐘を鳴らしました。ク

スコ地方の芸術家としてアルゲダスと親交のあったファン・ブラボ・ビスカラ (Juan Bravo Vizcarrá) も、クスコ市内での大衆的な食堂酒場 (picanterías) を、すべての社会階層が集まる場として特に好んでいたアルゲダスの姿を紹介していました。

締めくくりの講演を担当したウィリアム・ロウ (William Rowe、ケンブリッジ大学) は、アルゲダスの作品を文学としてどのように読むかについて斬新な考察を行いました。その主張の根幹は、アルゲダスの作品はオルタナティブな「啓蒙 (iluminación)、光が発してそれに照らし出されること)」の可能性を指し示しているのであって、それは超越的な光ではなく物質自体から発する光を基盤としているのだという見方にあります。ロウは『La agonía de Pasanishi』(「ラス・ニーティの最期」) という短編を参照しながら、そこではまず「踊り」が一つのテクスト性 (textualidad) として読みの道筋を示しているのであると指摘します (注8)、そこで焦点が当たる断崖絶壁、洞窟、鳥、昆虫などは、風景との魔術的なつながりと繊細な注意力を意味するのであって、そこには物質性自体から記号と形式が現れてくるという「躍動する物質性 (materialidad vibrante)」の可能性が示されているのであり、世界の外側から射し込む光ではなくこのような光が物質自体から発していることに目を向けるべきだと述べました。また、権力とは時間 (時代) の支配ということだと述べたうえで、鉄踊りの師匠の死に伴って、

時間の流れが遅くなり、芳香や踊りや「私は準備ができている」という言葉が「絶対的な現在」を指し示し、死を前にして全てを聞くことができるようになり、そこにワマニ (Wamani、コンドルの形象をもった山の神) が現れ弟子のAtok・sayku に乗り移る過程で、時間が切断され根源的に新しい時間性 (時代) (temporalidad) が始まっていると主張しました。これはアンデスにおける「踊り病 (Taki unquy)」という植民地時代の歴史的過程を参照しているながらも、より一般的に、時間を縛り取ることで新たな時間を到来させるといふ、アンデスの思考が自らを刷新していく能力を指し示しているのだという見方を示しました。この発表は、政治・社会的過程における開けへ文学の側からもつながろうとするものだと考えられ、多くの聴衆に感銘を与えました。

厳密な考証や理論的考察に基づく発表が、当時と現代の政治運動を担う人たちの省察と訴えかけと噛み合い (注9)、当時を回想する友情と感傷がそこに加わり、写真展やアルゲダスの作品の漫画化のプレゼンがあり、それが学生たちという新しい世代が醸し出す空気と相互作用し、締めくくりはホセフィナ・ニャウイス (Josefina Nahuis) の歌うワイノ (huayno) に併せて踊るといふ国際会議でした。

(注1) ポリビア・カトリカ大学客員研究員。  
Blog: <http://chukiyaunkiri.twa.blogspot.com>;  
Twitter: <http://www.twitter.com/fujitai023>

(注2) これまでに日本で刊行されている作品は以下の四点です(日本での刊行順)、『深い川』現代企画室、1993年。『ヤウル・フィエスタ(血の祭り)』現代企画室、1998年。『アルゲダス短編集』彩流社、2003年。『ダイヤモンドと火打ち石』彩流社、2005年。ただし、晩年の重要作品とされる『全つの血(Todas las sangres)』と『上の狐と下の狐(El zorro de arriba y el zorro de abajo)』は日本語に訳されておらず、これまでのアルゲダスに関する評論と研究の動向も十分に踏まえられているとは言えないでしょう。またアルゲダスの口承文学や民族学関係の仕事はペルー国内でも一般に入手困難なものが多く、しかしながら近年の研究はこれらのアルゲダスの晩年の作品や人類学者としての仕事に注目が集まっているということをも指摘しなければなりません。

でしょう。

(注3) Gregorio Condori Mamani は英訳もされています(Andean Lives)。

(注4) 後で本人に確認したところ、このケチュア語の使用者はかつての農園主(アセンダード)たちも含み、都市では市場の女性たちが使用するケチュア語もこれに近いと述べていました。Quechua gamonal と「つじ」とを一瞬検討したのだが、反発が大きいかと思い、より抑えた表現にしたそうです。

(注5) ケチュア語が三母音なのか五母音なのかというのはかつて論争になったことがあり、理論的には三母音で、実際には後の子音などの影響で引張られて「五母音ばく」なるというのが私の理解だった(そして通説だった)のです。本当に三母音だというのは、aの音に加えて、iとeの中間あたりの音、

「*o*」の中間あたりの音、の三つです。

(注6) インカ・ガルシラン・デ・ラ・ベガ賞(ペルー)受賞講演。この有名な講演は『上の狐と下の狐』の冒頭にも置かれています。

(注7) この書簡のスペイン語訳は、Blanco, Hugo, 2010. *Nosotros los indios*. Buenos Aires: La Minga y Herramienta. に収録されています(Eduardo Galeano y Raul Zibacchi の序文つき)。

(注8) ここでは、アンデスの織物を「テクスト」であると考えるポリビアの Denise Arriola の議論との共鳴について、ロウ自身が言及したところでもありました。

(注9) ラテンアメリカの政治運動や社会運動を実践する人たちは、濃密な思考・思想を同時に展開しようとする傾向が強いという印象を受けます。

## ペルー 鵜とともに暮らす2 古谷 桂信

プンタ・コーレスの話に入る前に、ペルー太平洋岸の気候について紹介しておく。ナスカの地上絵が現在まで残されたことから知られるようにペルーの太平洋岸は乾燥気候だ。でも、その砂漠は、半端ではない荒れ果てた景色なのだ。たとえば、レコムメンバーにとって、馴染

みの深いメキシコ北部のサボテンが点在する砂漠と異なり、ペルーの海岸は、ひたすら延々と砂丘が続く。ペルーの二〇〇〇キロを超す海岸線全部、鳥取砂丘の何倍もの砂丘になった光景を想像できるだろうか。まるで別の星に来たかのような光景だ。その海岸線に時々、アンデス

から下る川が流れ、そこだけがオアシスとなり、川沿いに農業が営まれるというのが、ペルー太平洋岸の気候なのだ。その海岸線を、リマからおよそ一五〇〇キロ南下すると、プンタ・コーレス近くの町、イロに着く。

ここで、同行の二人の日本人を紹介したい。環境社会学者の牧野さんは、関西学院大学の経済学部から大学院は社会学部に進み、私の指導教員、鳥越皓之先生のゼミに所属し、滋賀県知

事の嘉田由紀子さんが当時（一九九九年頃）、統括学芸員をされていた琵琶湖博物館の연구원となった。牧野さんは、この春から、熊本大学の教員として赴任し、琵琶湖博物館への最後の恩返しとして、今回の鶴の企画展『困ったカワウー生き物とのつきあい方』（7月16日から）の担当者となった。

もう一人、この企画のコーディネーターを務めてくださった井上亜木さんは、みなさんご存じの神戸市外大スペイン語科（現在は、京都大学教員）の小林致広さんの教え子であり、一九八〇年代後半にペルーを旅行し、そのまま滞在するようになった。ペルーを題材にした数多くのテレビ番組（『地球浪漫』とか、『ウルルン滞在記』ペルー・アマゾン編など）のコーディネーターを務め、今回、成田有子さんの紹介で、たまたまスケジュールが合ってコーディネーターを務めていただいた。井上亜木さんのスーパーコーディネーターがなければ、今回の取材は不可能だった。実家は西宮市なので、日本に帰国されたときは「ぜひ、レコム事務所（図書館）に来て下さい」とお誘いしている。

昨日夕刻にリマを出て、二〇一一年二月二六日正午近く、プンタ・コーレス近くの町イロに着いた。人口一〇万人弱。近年近郊で銅が産出され、銅の精錬と積み出し港として好景気に沸いている。ここから車で一〇分ほど、四〜五キロの距離に、現在グアノ（ウミウのフン）の採集作業をしている場所があるという。ホテルを



確保し、シャワーを浴びてから、プンタ・コーレスのグアノ採集作業場へと向かう。途中、広大な砂浜の海水浴場を通ると、すぐにウミウの絵が描かれた扉と延々と続く塀が見えてきた。この塀は、密漁者を防ぐために設置された。近年は、鳥の観察をしたいという野鳥マニアや、観光客も来るが許可がない限りはすべて立ち入り禁止だ。我々は、本省の許可があるので入れてもらう。扉からさらに二キロほど進むと、オフィスと作業員の宿泊施設が見えてきた。



アグロローラル（地域農業振興局）の島守のオフィスで、フェリペ・アドリアンセンのⅡ写真Ⅱから話を聞いた。彼は、リマの島守オフィスで会った、島守を統括する長官ホルヘ・ディアスの腹心だ。ウミウのグアノの採集量や採集場所などの決定権は、環境省の鳥類担当に移ったものの、伝統的にはアグロローラルが、鳥の保護とグアノの採集を両立してきたため、現在も、半島と島のグアノ採集場所の管理は、アグロローラルの島守を統括する部署が担当している。その長官ホルヘ・ディアスは、ウミウの保護に情熱を傾けていて、我々の調査に対して全面的に協力してくれた。そのホルヘがもつとも信頼している部下の一人が、ここプンタ・コーレスの島守フェリペだと聞いていた。フェリペを訪ね、作業現場を案内してもらいながら話を聞いた。

以下に、フェリペの話 요약する。

今日の作業は、ちょうど終わったところです。みんな、これからシャワーを浴びて、休憩です。ここでは、採集作業員として一六一人が働いています。アグロローラル

の職員は一〇人で、そのうち島守が三人です。みんなの健康管理を担当する看護士も一人います。

作業員は、アンデスのアンカシ県とアヤクーチヨ県の出身が多く、アマゾン地方からも少し来ています。アンカシ県の例を紹介しましょう。一九七〇年の地震で氷河が崩壊し川を堰き止め土石流が発生し、ユンガイ市とカラス市で大きな被害を受けた集落ができました。その人々に生活復興の仕事として、グアノの採集作業をしてもらうようになり、それが伝統になったんです。

この労働は過酷ですが、賃金的には比較的恵まれています。日給は四〇ソールス(約1200円、1ソール≒約30円)です。ペルーの最低賃金は二〇ソールですが、彼らが暮らすアンデス地方では、日給一〇〜一五ソールスなのです。ですから、ここで働く人々は、自分の畑は知人に耕してもらい、労賃をこの給料から払っているのです。でも、朝四時から午後三時までの労働は、たいへん過酷で、アンデスの農民の方々しか長続きしないのです。都市や海岸地方の人が来たこともありませんが、まずもたないですね。

プンタ・コーレスでは、グアノを一日五〇トン採集します。一袋五〇キロなので、一〇〇〇袋です。ここでは今期四〇〇〇トンの採集を予定しています。ペルー全体の二二カ所の採集場所では、今年二二万

トンが許可されています。ここでは前回二〇〇六年に採集しました。近年は四〜五年に一回、採集するようになっています。

この作業員は約三ヶ月の作業で四〇〇〇トンの許可量を採集する予定です。この現場が終われば、村に帰る人もいれば、引き続き別の採集場に移る人もいます。希望も聞きますし、こちらからお願うする場合もあります。

我々島守は、グアナイ(ウミウ)を守り、グアノを利用することで農民の暮らしが豊になることを願っています。陸から侵入してくる者はほとんどいませんが、海からは



船で密漁者が侵入してきます。武器を持っているものもいますので、危険もともないますが、ここでの仕事に誇りを持っていきます」

空には雲一つない。夏の終わりの日差しは強烈だ。空も青、海は藍色、二色の青色の間に真白い地面が広がる。地面は照り返しが強烈で、日陰はまったくない。オフィスから一キロほど歩いたところが採集場だった。グアノの厚みは一〇センチ弱で、ところどころ、小山状に集められている。地面からグアノだけが剥がれるので土との区別は簡単だ。

ここより先は、立ち入り禁止というラインの一キロほど先に、ウミウ(コルモラン)とペリカンの大群が見える。海岸にはアザラシの群れがいて、体の大きなオスが唸り声をあげつづけている。観光客や、野鳥観察の愛好家が入りたがる気持ちもわかる。波の音とアザラシの声で、牧野さんや井上さんに話しかけるとときも大声を張り上げないといけないほどだ。

オフィスに戻ると、すっかりくつろいだ作業員たちが集まってきた。先週には、フランスのテレビ局が取材に来たという。明日は、午前四時から作業開始なので、朝三時半に来て、取材をさせてもらうことにしてホテルに戻る。

翌日、三時半、オフィスに着いた。真つ暗だ。作業員の朝食は配給の乾パンとコーヒーで、食べ終えたものから作業場に向かうⅡ写真。

空には、星がまたたいている。ここは、海辺なので、昔、アンデスで見たほどの星空ではない。岬からイロの町を振り返ると、銅の精練所に煌々と明かりがともっている。

まだ夜も明けないうまま、作業開始の合図もないうまま、てんでバラバラに作業がはじめられた。作業は分業で、グアノを地面から剥がす係、集めた板状のグアノを砕く係、砕いたグアノを運ぶ係に分かれている。弱くストロボを焚くと、



すさまじいグアノのホコリが写っている。昨日の下見ではあまり感じなかった匂いもすごい。グアノは、鳥のフンだから匂いは当たり前なのだが。しかし、このホコリでは、レンズ交換ができない。海風の吹き付ける風上に回り込んでレンズを替える。

そうこうしていたら、イロの町の反対側から夜が明けはじめた。夜明けの中、漆黒の闇から紺碧のグラディエーションを背景に作業する場

面を撮影するⅡ写真上。牧野さんと井上さんは、作業手順の聞き取りをしているが、こちらはとにかく撮る。

夜が明けると、作業現場全体が見渡せたⅡ写真中。海を背景に、全作業員のおよそ三分の二がここで働いている。残りは、もう少しオフィスに近いところで、集めたグアノをふるいにかけて、袋詰めする仕上げの作業を担当している。その光景を遠くから眺めると、ホコリに煙りながらの作業はかなり幻想的に見える。

採集作業を撮り終え、そちらの仕上げの撮影に向かう。こちらの方が、匂いとホコリはすさまじいⅡ写真下。作業員は、みんな砂漠の民ベドウィンのような姿で働いているが、砂じやないのは匂いでわかる。この作業で、グアノはさ



らさらのパウダー状に仕上げられる。今日の作業の成果が、次々と袋詰めされ集められてくる。

牧野さんと井上さんも戻ってきた。作業を見ていたらなんとなく、日本人代表として五〇キロの袋にチャレンジしないといけないような雰囲気になった。試しに運ばせてもらう。こんな時、普段は役に立たないバカ力が役に立つ。「ずしっ」とした重さ。なんとか運ぶことはできた

が、これを一日中続けるのはなかなかたいへんだ。

採集作業の取材後、昼食をいただいた。作業員の献立は、じゃがいもなど具だくさんのスープと、レバーソテーの Pasta 添えだったが、我々には、同じスープと目玉焼きとトーストをご馳走してくれた。

明日は、この時期、陸からアクセスできてウ

ミウ（コルモラン）が集まっている唯一の岬、ブンタ・サンファンへと向かう予定だ。作業の撮影は、順調だったが、今のところ、肝心のウミウは、遠くに小さくしか撮れていなかった。（つづく）

第19回企画展示『困ったカワウイキものとのつきあい方』2011年11月23日まで滋賀県立琵琶湖博物館追加料金大人200円

## メキシコ「平和のための沈黙の行進」

小林 致広

二〇一一年五月五〜八日、国内の三五都市で、「正義と尊厳を伴う平和のための全国行進」が行われた。六月四〜一〇日、メキシコ市の南の

モレロス州都クエルナバカから北部国境のチワワ州フアレス市まで、「正義と尊厳を伴う平和のための市民キヤラバン」がキャンペーン活動を展開した。一連の「平和のための行進とキヤラバン」を呼びかけたのは、モレロス州の「別

のキャンペーン」の支持者で詩人のハビエル・シシリアだった。

彼がこうしたキャンペーンを提起した契機は息子の殺害である。二〇一一年三月下旬、彼の息子の遺体が他の若者の遺体とともに発見された。若者たちは、カルデロン政権が推進する対麻薬組織戦争、いわゆる「カルデロンの戦争」の犠牲者リストに加えられた。しかし、免責率

九割以上という状況では、本格的な事件調査が進むはずはなかった。ハビエル・シシリアは、正義不履行や免責構造、社会運動家に対する弾圧に異議申し立てするため、全国キャンペーンを提起したのである。

「カルデロンの戦争」の犠牲者は、麻薬組織関係者や軍警察関係者といった「当事者」だけではなく、多くの無関係の市民が含まれている。サパティスタ民族解放軍（EZLN）副司令官マルコス、二〇一一年二月の哲学者ルイス・ビジョロ宛の書簡『戦争について』で、対麻薬組織戦争の死者三万二千人のうち、実際の犯罪者はどれだけなのか？ と問いかけていた。「カ

ルデロンの戦争」の犠牲者数は、銃火器などの「武器」で殺された人の数である。その後も、戦争の犠牲者は増え、二〇一一年五月末の時点で、死者は四万人、負傷者一万五千人に達したとされる。単純に計算しても、一月七五〇人、一日二五人が戦争犠牲者となっていることになる。

### 5月7日、サンクリストバル市での「サパティスタの沈黙の行進」

「平和のための全国行進」の呼びかけに呼応し、チアパス高地の中心都市サンクリストバル市で、EZLNの組織したサパティスタ支持者の「沈黙の行進」が行われた。チアパス州内の五つの善き統治評議会の管轄地区から、約一万五千人サパティスタ支持者がサンクリストバル市に集結した。その規模は、二〇〇六年の「別のキャンペーン」開始時の集会を凌ぎ、二〇〇一年二月の「大地の色の行進」開始時の集会に匹敵するものだった。乗合トラックなどで集まったサパティスタ支持者はスローガンを連呼することなく、「カルデロン戦争、即時停止!」「これ以上の血を流すな!」「いい加減にしろ!」といったプラカードを掲げ街路を行進した。

夕方五時過ぎ、EZLN司令官三〇名弱が大聖堂前の演壇に上がり、「平和のための全国行進」の参加者にむけたEZLN先住民地下革命委員会のコミュニケーションを発表した。最初にスペイン語でコミュニケーションを読み上げたのは司令官ダビであ

る。その後、コミュニケーションは、四名の司令官によって各民族集団の言語で読み上げられた。メッセージに先立って、司令官ダビは、「カルデロンの戦争」の犠牲者や遺族に向け、「No están solos (あなたたちは孤立していない)」という叫びを七回繰り返した。このフレーズは、一九九四年の武装蜂起以降、EZLNが市民社会から受け取ってきた連帯の言葉にほかならな



サンクリストバル集会でカラコルIIIの参加女性

い。「平和のための全国行進」の賛同者として、EZLNはこれまで受けてきた「No están solos」の言葉を、「平和のための全国行進」の組織者たちに投げ返したのである。サンクリストバル市の集会は、EZLNの方針や展望について説明する場ではなかった。自らの苦悩、戦い、夢、生と死について語り、生のために戦うことを訴えている「カルデロンの戦争」の犠牲者に寄り添い、連帯するため、サンクリストバル市の沈黙の行進は組織されたのである。

### 5月8日、メキシコ市での集會

クエルナバカ市を八〇〇名で出発した行進は、八日早朝のメキシコ市南部到着時には、一万人に膨れ上がった。昼過ぎから、ソカロ広場で「カルデロンの戦争」の犠牲者七〇名による証言が行われた。女性殺害事件が続発する「地獄の都市」フアレス市の人権活動家オルガ・レジエス、エルモシージョ市の保育園の火事による幼児死亡事件を追求してきたパトリシア・ドウアルテなどを除けば、多くは人々の前で証言をした経験の少ない人だった。この首都での行進には一〇万人以上が参加したとされる。集会の最後に、「戦争」のシンボルの事件となったハビエル・シシリアの息子殺害など八つの事案について、三カ月以内の真相究明と正義実行を政府当局に要求するなど、要求項目をまとめた「市民協定」案が提示された。この市民協定は、一ヶ月後の六月一〇日、フアレス市



集会の演壇に立つ EZLN 司令官たち

までのキャラバンの終了時に調印された。  
二〇〇六年以来、サパティスタが展開してきた「別のキャンペーン」の支持者もソカロの集会に参加していた。主のグループとして、空港建設反対運動を展開してきたメキシコ州のサルバドル・アテンコの土地防衛民衆戦線、ゲレロ州東部の山岳・海岸地域で組織された共同体警察の代表や先住民民族アムスゴの共同体ラジ

オ・ニヨムンダ、準軍事組織に抵抗しながら自治を求めてきたオアハカ州の先住民族トゥリキのサンファン・コパラ自治行政区政府や支援組織カクタスなどが参加していた。ミチョアカン州からは、共同体の森林を違法伐採から守るために自治体制を強化しているチェランの共同体成員も参加していた。

### 武器なき静かな殺人

「殺害」は武器だけで行われるわけではない。五月上旬の全国行進の際、チアパス州の北部・高地・国境隣接地域の一部の先住民共同体の女性たちは、全国の女性とEZLN宛てのメッセージで次のように述べている。「政府は貧困や飢餓で私たちを殺している。さまざまなプロジェクトで私たちを騙してきた。私たちから時間や決定権を奪い、考えを押し付け、私たちを分断し、組織化を邪魔してきた。…共同体の近くに、軍隊、警察、検問所があり、恐怖を与え続けている。軍隊が人々を助けるといっているのは嘘で、私たちを暴行し、殺害している」

人々を騙してきたプロジェクトとして、化学肥料・農薬・遺伝子組換え作物の導入推進、バイオ・エタノール生産のためのアフリカ椰子や南洋油桐 (jatropha) のモノカルチャー推進などが挙げられている。また、集団的所有体制のエヒードや共同体の土地を私的土所有制へと転換する計画などで、共同体が分断され、コカ・コーラ社などによる水資源独占を許してしまっ

たことも指摘されている。土地を奪われた農民は、家族を養うため別の仕事を求め、季節労働者として土地を離れていく。五月八日のメキシコ市の集会で発言した「メソアメリカ移住労働者」のグアテマラ人も、こうして共同体から引きはがされた人たちである。



## 連載第三八回 『ラ米百景』

伊高浩昭(ジャーナリスト)

### 第57景

#### ネルーダの亡命地を訪ねて

私はスペイン語の詩が好きだ。おそらく、自分がだからだと長ったらしい記事を書く散文的な(プロサイコ)生き方をしているからだろう。6月に来日したペルー人作家マリオ・バルガス・ジョサも講演会で、「小説は、文学における完成度において詩に遠く及ばない。詩は完成されている」と言ったが、その際「私は散文(小説)の道に入ったから、なおさら詩に憧れるのだ」という趣旨のことを話していた。私はとくに、チリの詩人パ

ブロ・ネルーダ(一九〇四～七三)が好きだ。

ネルーダは自国政府から迫害されたが、五二年には地中海のイタリア領カプリ島に滞在した。その間の生活ぶりを基にチリ人作家アントニオ・スカールメタ(一九四〇年生まれ)は八五年『ネルーダの郵便配達夫(エル・カルテロ・デ・ネルーダ)』を書いた。それが九四年イタリア映画「イル・ポステイーノ(郵便配達夫)」になり、世界的に有名になった。映画の中に、チリから送られてきた旧式のテープレコーダーをネルーダがかかる場面があるが、メッセージを吹

き込んだ友人知人らのなかに「アントニオです。先生お元気ですか」というような調子で、スカールメタが登場する。

私は、九〇年代半ば、この映画を東京で観て以来、カプリ島にいつか行きたいと思うようになっていた。カプリ島といえば、ヴィルヘルム・グロース(一八四九～一九三九)の名曲「カプリ島」で小中学生時代から名前だけは知っていた。グロースは「夕日に赤い帆」や「港の灯」でも知られている。私は、これらの曲(ジミー・ケネディの歌詞も)好きだ。

ネルーダには『我が生涯の告白』という回想録がある。本人の死後一年経った七四年に刊行されたものだ。そこには、「有名な歴史家エドゥウイン・チェリオから、カプリ島にある別荘を提供するという夢のような手紙が届いた」とある。私は、この島に行ったら、そのネルーダの住んだ邸宅を訪ねてみようかと決めていた。そ

の機会は二〇一二年三月一五、一六日、ナポリに一泊二日した時に訪れた。私は船上講師としてピースボート世界一周船に乗っていたが、船がリビア内戦のためトリポリ寄港を中止したことからナポリ滞在が二日になり、船でカプリ島に行く時間的余裕ができたのだった。

船上講師の助手を務めてくれた、やはりネルーダ好きで勉強家のビオレタ嬢とともに三月一六日朝、大雨で時化した地中海に快速連絡船で乗りだした。大いに揺れたが、小一時間で島に到着した。不思議にも雨は止んで、晴れていた。港から町までは急な斜面を小型バスで登らねばならない。ネルーダは、妻マティルデとともに馬車で登ったと回想録に書いている。私は、映画で郵便配達夫が自転車を上り下りする設定の坂道はこの辺りではないか、と見当をつけた。丘上の町は洒落ていた。腹ごしらえをしてから、「ネルーダの家」探しに取り掛

かった。

ところが、それがどこにあるのか誰も知らない。詩人の名前さえ知らない島人が多いのだ。たしかに、ネルーダがこの島に数ヶ月間滞在してから五九年も経っている。無理もない。そこで長老級の人々に片っ端から訊ねることにした。何人か試みるうちに、ローマから妻の実家に来ているといふ気の利いた紳士が本屋で確認し、道を教えてくれた。確かにあった。道の入り口に、「この道沿いに。パブロ・ネルーダが住んでいた」と書いた道標の金属板が掲げられていた。その紳士は、見当を付けた家々の住人にインターホーンで訊ね、ネルーダ夫妻が住んだ別荘を突き止めてくれた。

別荘は、地中海の海岸に下る斜面に階段状に造られている。緑豊かで、眼下は紺碧の海という素晴らしい環境だ。道の行きどまりは断崖絶壁で、展望台になっている。はるか眼下に

青い海と白砂の浜辺が広がっていた。映画の一場面にあったような光景だ。別荘内には入れなかった。だが、これで十分だった。ビオレタ嬢も喜んでいった。私たちは再びバスで港に降り、連絡船で小さな半島にあるソレントに渡った。カンツォーネ（ナポリ民謡）の名曲「帰れソレントへ」の郷愁の舞台である。この町の酒場で、ネルーダの住まいに到達できたのを祝って乾杯した。

ソレントからは電車で、ヴェズヴィオ火山の麓のポンペイ遺跡駅を経て一時間半でナポリに戻る。ナポリ港の先にはサンタルチア地区があり、ここが昔、貧しい漁村だったころ、「サンタルチア」、「はるかなるサンタルチア」などの名曲が生まれた。だが今は漁村はなく、味もそっけもない富裕層のヨット港になっている。カプリ島とソレントを訪ねてよかったとあらためて思った。

ラテン音楽世界には、二人のルーチャ・レジエスがいる。一人はメキシコのランチェーラ歌手であり、もう一人はペルーのクリオーヤ歌手だ。

## 音楽三昧♪ペルーな日々(第41回) 「伝説のルーチャ・レジエス」

共に大きな人気を得て、絶頂期に若くして亡くなったという点も一致している。おそらく国際的にはメキシコのルーチャ・レジエスの方が有名だったと思うのだが、ネットで検索するとペルーのルーチャ・レジエスの方がいろいろヒットする確率が高いように思う。ともかく、両者ともに稀有の歌い手であった。今日は、このペルーの「黄金の声のモレーナ」ことルーチャ・レジエスについて紹介したい。

僕がルーチャ・レジエスを初めて聴いたのは、クリオーヤ音楽を聴くようになって大分経った後だった。彼女の歌がすごい、というものはそれまでもいろんな人から聞いていた。しかしCDやカセットテープのジャケットに映った彼女の、かつらをかぶって褐色の肌に長いつけまつげと派手な青いアイシャドウを塗った顔のインパクトの強烈さに、今ひとつ購買意欲がわかず長らく未聴のま



まだった。なので、初めて買った彼女のテープは、安いペルーの海賊版だった。そして、その音楽を聴いた瞬間、僕は撃ち抜かれた。その歌声はまさに黄金の声となって僕の心を虜にした。なぜ、多くの友人に勧められながら、僕は今まで彼女の歌を聴かなかったのか、と後悔した。それほど彼女の歌は素晴らしく魅力的だった。

彼女は、ペルーのサクセス・ストーリーを体現した歌手だ。それと同時に、貧しい頃からの無理がたたって入院を繰り返しながらの音楽活動に命を捧げた人だった。彼女は一九三六年にリマ市リマツクの貧民街に生まれた。生まれてすぐに父を亡くし、母は一七人いた子供を養えず、ルーチャは幼い頃から人の家に預けられたり、時には物乞いまでしながら大きくなった。

家々を転々とするなかで、リマでも民衆のクリオーヤ音楽がもつとも花開いたバリオ(街区)の一つ、メルセダリアで音楽と出会い、いつしか彼女もクリオーヤ音楽を歌い始めた。

ナイト・クラブなどで着実に実力をつけた彼女は、五八年についてラジオ・デビューを果たす。しかし翌年、薄給ながらラジオ、クラブ、劇場などで歌っていた彼女を病が襲った。肺病から始まり、糖尿病、腎臓疾患、高血圧などの病気の戦いがその後生涯に渡って続くこととなった。

彼女を決定的に有名にしたのは、七〇年に初めて録音したLPだった。その冒頭を飾った「レグレサ」は、今なお彼女の代表曲として愛されている。こうしていよいよその名声を高めながらも、病状は一進一退で入院を繰り返した。ホセ・アントニオ・プロピエダー・プリバダ、ハマス・インペデラスなど、彼女はバラスを最も得意としたが、マリネラや時にワイノなども魅力的に歌った。「黄金の声のモレーナ(褐色女性)」以外にも、「ペルーのエディット・ピアフ」や「民衆の女王」などとも呼ばれた。

そうして必死に闘病しながら歌い続けた彼女も、いつしか自分の死期が迫っていることを感じずにはおれなかったようだ。一九七三年の初め、彼女は親しいバルスの作曲家であったペドロ・パチエコを訪ねた。彼女の依頼は、自分の

歌を愛してくれる人々へのお別れの歌を作って欲しいというものだった。驚いたペドロは、何を馬鹿な事を！と拒否したと言われているが、結局、彼女の情熱に負けてその依頼を引き受けたこととなった。そうして生まれたのが伝説となった彼女の最後の歌「ミ・ウルティマ・カンシオン（私の最後の歌）」だ。情熱的なピアノとともに始まるこのバルスは、彼女の命が尽き、この歌が最期の歌となること、そして彼女とその歌を愛してくれた人々への感謝の気持ちが切々と歌い上げて、彼女の溢れ出る涙と共に曲は終わりを迎える。この曲を録音してすぐに彼女が亡くなることになるとは、この時はまだ誰も思ってもいなかった。

その年の十月三十一日、クリオーヤ音楽を愛する人々にとって大切な日である「クリオーヤ歌謡の日」にルーチャ・レジェスはこの世を去ることとなった。その日の演奏会場へと向かう車の中で発作を起こし、あつという間に帰らぬ人となってしまったのだ。渋滞する車列の中で恋人のアルベルトは彼女を呼び続けたが、病院へとたどり着いたときにはすでに冷たくなっていったという。ルーチャ・レジェスの突然の訃報は多くの人々を驚かせ、そして悲しませた。当時のベラスコ大統領は副官を弔問に送り、多くの音楽家たちが悲しみのコメントを残し、最後のお別れに訪れた。

翌十一月一日は、いわゆる「死者の日」であり、

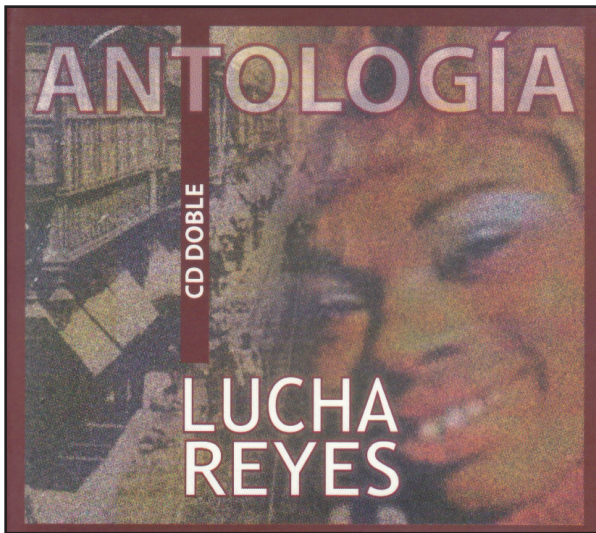
ラテンアメリカの多くの地域で家族でお墓参りをする日になっている。リマの中心にあるサン・フランシスコ教会でミサを終えた後、十一時頃彼女の遺体は音楽家たちに担がれて出棺した。彼女にお別れに来た多くのファンが彼女の姿を見て、「戻ってきて！」と代表曲「レグレサ」を唱和した。車に乗せようとする度に、人々がそれに反対し、墓地までの約四キロを結局様々な人に担がれ、見守られながらゆっくりと進んだ。（この時の様子はYouTubeで見ることができる）棺が結局墓地に到着したのは午後三時半だった。到着後も多くの人々が彼女に最後のお別れとお礼を伝えようとするあまり、か

なり混沌とした有様だったという。それほど、彼女の死は人々にとり大きなものであった。

貧しい生い立ちでありながら、リマの、そしてペルーの人々に最も愛された歌手となったルーチャ・レジェスは、三七年の生涯の中で何度も離婚を繰り返した。更に病との闘いは想像を絶するものであったとも言われる。そうして彼女が残した歌は今も人々に歌い継がれ、変わることなく愛されている。一度彼女の歌を聴けば、それだけで多くの人が大きな衝撃を受け、やがてそのインパクトはさらに揺るがぬものへと変化する。深く表現される彼女の情感豊かな声は、彼女の歌一曲一曲をかけがえのない素晴らしい作品へと昇華させた。彼女のその早逝が悔やまれるばかりである。

最近では、彼女の歌もベストなどが編まれたりとずいぶん手に入りやすくなった。どの曲、どのアルバムも素晴らしいが、最後に変わり種を一枚紹介するとすれば、彼女がラジオ出演した際のライブ録音「エル・シヨール・デ・ルーチャ・レジェス」を上げたい。死後の七五年に出たアルバムで、彼女のライブでの歌やおしゃべりを聴くことができるのは本当に嬉しい限りだ。ぜひ、代表曲に酔いしれた後にも聴いてみてもらいたい一枚だ。

（水口 良樹）



## ケサディージャ

QUESADILLA



## ●材料（4人分）

- ・小麦粉のトルティーヤ 8枚
- ・ピザ用のチーズ 大さじ8杯
- ・レタス 量はお好みで
- ・サラダ油 大さじ4杯
- ・ハラペーニョ薄切り 量はお好みで
- ・トマト味のメキシコソース 量はお好みで
- ・キュウリ 1本

## ●作り方

- 1) キュウリとレタスを洗い、食べやすい大きさに切る
- 2) 透明のビニール袋にトルティーヤに入れて電子レンジで1分間あたためる。(破裂を防ぐため袋は密閉しない)
- 3) トルティーヤの上に大さじ1杯ずつチーズをのせ、半分に畳む(半月状に)
- 4) フライパンに大さじ1杯のサラダ油を入れ、ケサディージャ2枚ずつ、弱火で4分間程度、焦げないように気をつけて火を通す。途中でひっくり返して両面を揚げる。
- 5) 平皿に揚げたケサディージャを2枚ずつのせて、キュウリとレタス、トマトソース、ハラペーニョを添える。

ミゲル・アクーニャ メキシコで中学・高校の英語教師をしたあと、1986年に来日。「FM COCORO」で7年間DJをつとめた。現在、大阪の下町・天満で「メリダスペイン語教室」<http://www.merida-mex.com>を主宰。

ソマリサの記事を毎回ご覧いただきありがとうございます。二〇品目のレシピは、メキシコ中の食卓にのぼる「ケサディージャ」です。

スペイン人の到来以前から、古代のメキシコ人は、野菜やキノコ、肉、魚介類をトウモロコシのトルティーヤにのせて半分に折り、まさにケサディージャの形にして食べていました。

スペイン人がチーズと小麦粉をもたらすと、まずはトウモロコシのトルティーヤにチーズを詰めて食べるようになり、後に、メキシコ北部で小麦粉のトルティーヤを作るようになりました。

「queso（チーズ）」という単語から「quesadilla」と呼ばれるようになり、古い料理名は忘れ去られてしまいました。

メキシコ市周辺を襲った一九八五年の地震までは、ユカタンでは、トウモロコシのトルティーヤでケサディーヤを作っていました。ところが地震後、メキシコ中部の住民が大挙してユカタンに移住してきました。七〇年代からのユカタンの経済・産業の繁栄もその流れを後押ししました。

異なる食文化をもつ移住者のため、ユカタンのスーパーでも、メキシコの他の地方の食材を売るようになりました。

ケサディージャは簡単に調理できるため、あわてて外出しなければならぬ時や、突然の訪問客があつたときに重宝します。私の実家では、ケサディージャの材料は家に常備していました。ふだんは朝食に食べますが、来客にもふるまいます。

した。今もメキシコに帰ると、ケサディーヤを食べに出かけるし、親戚や友人宅でも、食卓にのぼらないことはありません。一品料理であると同時に、おやつでもあるのです。

日本の家庭の冷蔵庫にも、チーズやレタス、油は常備していると思うので、あとはトマト味のメキシカンソースと小麦粉のトルティーヤを買い足すだけです。どちらも、ダイエーや成城石井、阪急などのスーパーで購入できます。

コンビニエンスストアや、モスバーガーなどのハンバーガーチェーンではトルティーヤを使った商品を見かけます。メキシカンソースや小麦粉のトルティーヤは、すでに日本の料理の一部になっているんですね。

# ラテンアメリカ交流事業のご紹介

池田 佳代

この秋、グアテマラのサン・ファン・コマラパトサン・ファン・デル・オビスポで、写真と語りをモチーフとした映像を制作し、その後、東京や京都でも同様の映像を制作します。そして、それぞれの映像を交換し合い、来春には制作者同士がインターネットを通じて直接対話する機会をつくる、という計画がスタートします。

計画したのは東京のNPO法人「おおた市民活動推進機構」。社会課題を解決する事業実施と、地域社会担い手の創出を目的に二〇〇六年、地域社会のニーズに対応した三事業を柱にNPOとして活動を始めました。大田区は、羽田空港の国際化もあって人口が年々増加し七〇万人を超え、一方で、核家族化、高齢者や若年労働者・単身赴任者等の単身世帯増加も顕著です。外国人労働者も暮らしており、人々が地域で孤立しがちな状況にあるともいえます。

## マヤ系先住民の多様性と 日常の営みを通じた継承

ラテンアメリカ交流事業の準備は昨春夏に始まりました。きっかけは、前年の冬に遡ります。同機構のメンバーである私は、〇八年一二月のスピーキングツアーでグアテマラから来日したマリアナさんにインタビュする機会を得ました。マリアナさんの衣装について尋ねた際、村ごとに独自のモチーフがあり、母から娘へと継

承されていくと聞き、数え切れない紋様があるのだろうと想像して夢が広がりました。また、すさまじい内戦を経験しながら、伝統の暮らしを続ける姿に誇り高さを感じたのでした。

また、数年前の国内の農村との交流を通じて感じていた「都会で育って田舎へ憧れて出かけては行くが、農作業や自然に囲まれた暮らしに憧れているわけではないのか」という疑問へのヒントが、マリアナさんたちのような営みを通じて見つけられるかもしれない、と感じました。

新川志保子さんと石川智子さんが春と秋に支援先の村々を訪問すると聞いて、昨秋、私も同行させていただきました。ハリケーン・アガタの影響で、アティトラン湖周辺で多様な織物に接する、という希望は叶いませんでしたが、マリアナさんと再会でき、織物組合も見学しました。コマラパの壁画や国内コンテストで優勝したマリンバグループの子どもたちに接し、自らのルーツを学び継承することの大切さを知りました。こういった取り組みを、大田区の人たちにも紹介したいと思ったのです。

## デジタル・ストーリーテリング(DST) の手法を用いた交流

DSTというのは、パソコンを用いた簡易的な映像制作です。ワークシヨップを通じて、自

分が伝えたいことが社会的な作品に仕上がりに、経験や想いが社会化される、といわれています。草の根の交流が目的ならば、第三者が構成するよりも、当事者が制作するほうがより現実味があり、共感しやすく、相互理解につながりやすいのではないかと考え、この手法を選びました。取り組みが、地域や文化、言葉を越えた普遍的な価値に気づく機会となり、パソコンなどを使った新しい楽しみやスキルを得る好機になれば幸いです。グアテマラを皮切りに毎年一カ国、ラテンアメリカの草の根の人たちとの交流をしたいと考えています。今年も、新川さん、石川さんにお世話になっています。レコムのみなさんのご協力をいただきながら、一〇カ国は実施したいという意気込みです。どうぞよろしくお願ひします。(おおた市民活動推進機構理事)

### おおた市民活動推進機構とは？

主な事業は①市民活動支援、②おおたのまちの自慢したい活動を伝える媒体の発行、③社会貢献活動団体や個人のための共同利用型資務所「ふらっとホーム大森」の運営です。

活動の一例は次の通り。▽年齢や障害の有無や種類、民族などを越えてチームを構成するスポーツ「おおたユニバーサル駅伝大会」の実施(年一回)や、その実施主体のNPO設立を支援▽外国にルーツを持つ子どもの支援として、日本語支援教室「はばたき」の実施(現在は学習指導も追加)や不就学状態の子どもの日本語や教科指導事業の実施▽精神障害者の就労支援活動(2008年)や発達障害児の居場所づくり▽フリーマガジン&ウェブ「やるじゃーん！おおた」の発行や、市民の情報発信支援

## ボリビア —— 増える人身売買、子どもが3ドルで

ボリビアでは斡旋業者による人身売買が激増しており、斡旋先では過酷な労働にもかかわらず、賃金が支払われず、劣悪な待遇を強いられるケースが後を絶たない。あるケースでは、月額2500ドルと言う約束でロシアに出稼ぎに行ったが、支払いはなく、過酷な労働で食事も満足に与えられなかったという。被害者220人が人身売買犠牲者の会を作り、斡旋業者に対して今年訴訟を起こした。斡旋業者に斡旋料を支払うため高額な借金をしていたり、家庭崩壊にいたることも多い。専門の調査機関によればマフィアが温床となって国境を越えた犯罪となっている。アルゼンチンの国境近くだけで毎年1万5千人の子どもたちが「両親の許可のもと」働きにきているがその多くが児童売春、児童労働の犠牲者ではないかと考えられている。またポトシ鉱山がある地域では子どもが一人3ドルから7ドルで売られていると告発されている。新聞や観光会社も斡旋に利用されている。ボリビアからのこのような出稼ぎの主な流入先はアルゼンチンとブラジルだ。ブエノスアイレスやサンパウロではしばしばボリビア人が奴隷状態で働かされている縫製工場が摘発されている。地方からラパスなどの都市に売られてくる少女たちも多い。政府機関である女性のための相談診療センターにはこのような少女たちが逃げ込んでくる。現在14人の少女がセンターにいて中には雇い主から強かんされた少女もいる。こうした状況を前に人権団体はボリビアだけでなくアルゼンチン、ブラジルなどの隣接諸国にも人身売買を行うマフィアに立ち向かい力を合わせることを呼びかけている。(BBC.MUNDO 2011/07/13より)

## ウルグアイ —— 国民投票で否決された失効法を承認か。

ウルグアイは1973年から1985年までの軍事政権下で、人権侵害を犯した軍人への免責を認めた「失効法」(1986年制定)を無効とする法案をめぐって下院で投票が行われた後、もめている。この「失効法」を無効とするかどうかについては二度の国民投票が行われたが、いずれも過半数で否定されている。にもかかわらず、ホセ・ムヒカ政権はこれを立法化しようとし、長時間にわたる議論のあと、50人の与党・下院議員が挙手を行い、一票差で同法を無効にすることが承認された。国民投票の結果を政府が尊重していないと反感を持つ国民も多い。同法が立法化するかどうかは上院での投票に委ねられている。

左翼連合拡大戦線(FA)は20年以上前から「失効法」無効の実現に向けて動いており、人権侵害の責任者を裁判にかけるということを党のスローガンとして闘ってきた。上院でFAは17議席をもっているが2人の与党議員(元副大統領と他1名)が反対を表明しており、法案が承認されるために必要な16票を獲得できるかどうかはまだわからない。

FAは党全体で賛成するよう要請しており、新聞によればFAは党の方針に従わない者に処分すると報じている。もし法案が承認されれば行方不明者の20人のケースが裁判にかけられ、10人の元軍人が召喚されることになる。しかし、多くの軍人がすでに死亡していることから法の処罰よりは象徴的な意味があるとされている。(BBC.MUNDO 2010/10/21より)

## メキシコシティ —— 深刻な水不足 飲み水確保に地下2000メートルの井戸

世界でもっとも人口の多い都市の一つであるメキシコシティは、水不足が一層深刻になっている。その対策として、地下2000メートルの深さまで井戸を掘るという前代未聞のプロジェクトが始まった。現在でも、メキシコシティの水はその71%を井戸に頼っているが、枯渇しつつある。これらの井戸は深さが50メートルから400メートルだが、これが地盤沈下を引き起こし、毎年40センチメートル沈下している地域もある。地盤沈下により、水道管が壊れることも多く、シティの水道の実に40%はこのような水漏れで無駄になっているという。ダムからも水を供給しているが、周りの砂漠化などで供給量が減り続けている。近隣のベラクルス州やメキシコ湾から水を引く、という案もあるが、これらは実施に時間がかかり、現在の水不足を緩和するための緊急の策として、深さ2000メートルの井戸という案が浮上した。この深さまで掘れば岩盤になっているために地盤沈下を引き起こさないだろう、ということだ。が、これがうまくいくかどうかは実際に水をくみ出し、それが飲料に適しているかどうかを確認するまでわからないという。(BBC.MUNDO 2011/07/14より)

5月から能登半島に住んでいます。揚浜塩田では日本海の海水と山の木々で塩をつくり、在来種の大豆をしぼった豆乳を、にがりがわりの海水で固めた寄せ豆腐を食べ、冬場には、田の神様を家に迎え入れて接待する(あえのこと)……。今も息づくそんな生業(なりわい)が評価されて、能登半島は「世界農業遺産」(G I A H S)に選ばれました。長年「裏日本」とさげすまれ、過疎と貧困の象徴とされてきた奥能登が育んできたものは、差別されつづけたマヤの女性たちが受け継いできた豊かな文化に重なります。周回遅れで最先端に立った奥能登に、ぜひお越し下さい。(藤井)

次回の「そんりさ」発送作業は 月 日(土)の予定です。  
参加いただける方は連絡ください。

メーリングリストのご案内： 会員・購読者は無料で参加できます。  
E-mail : recom@jca.apc.org までアドレスを連絡ください

ホームページのご案内 レコムホームページがどんどんリニューアル!  
<http://www.jca.apc.org/recom/>

- |                          |                         |
|--------------------------|-------------------------|
| Vol. 131 エクアドル・アマゾンの石油開発 | Vol. 127 コロンビア先住民族少年マウロ |
| Vol. 130 中米に広がるナルコ       | Vol. 126 エクアドル・フェアトレード  |
| Vol. 129 コロンビア政治状況の変化と行方 | Vol. 125 ボリビア気候変動世界会議   |
| Vol. 128 ペルー・バグア事件とその後   | Vol. 124 ハイチ大地震特集       |

レコムに入会(もしくは購読)すると、メーリングリストにも無料で参加できます。入会したら、自己紹介メールを添えてrecom@jca.apc.org までご一報を。登録します。レコムの活動は会員のみなさんによって支えられています。

☆郵便振替口座：00110-7-567396 日本ラテンアメリカ協力ネットワーク

☆会員 年 8000円(学生5000円)…会の運営、総会での投票、『そんりさ』、資料閲覧・貸出

☆賛助会員 年 10000円(一口)…資料閲覧・貸し出し、『そんりさ』購読、総会への参加

☆『そんりさ』購読者 年4000円…『そんりさ』の購読、メーリングリスト参加可

**レコム連絡先**

〒616-0004  
京都市西京区嵐山中尾下町20-15 太田方  
TEL&FAX 075-862-2556(留守電)  
お問い合わせは、E-MAIL・FAX・手紙もしくは留守番電話にメッセージをお願いします。

<レコム口座>  
45万4440円  
<グアテマラ基金>  
24万9561円  
(2011年7月現在)